

漢字学習書各種アプローチの検討（1）

— 表音的アプローチについて —

カイザー シュテファン

要 旨

漢字の学習・指導は日本・海外ともに伝統的には丸暗記や繰り返し書く作業を中心に行われてきた。しかし、一方ではいわゆる形・音・義を記憶しやすくするべく、いろいろな方法が考案されてきた。そういった方法の主なものをまずその特徴により7つに分類した上で、本研究ではその中で漢字の表音性を中心に据えた方法としてボトムアップ的アプローチとトップダウン的アプローチというべきものを取りあげて、その特徴と問題点について具体的に見ていく。さらに、漢字の表音性が今までどのようにとらえられたり、数値化されたりしたかについて検討し、効率的な漢字学習のためには部首などにたよる従来の方法に中国語・漢文で伝統的に行われてきた双声（頭韻）・疊韻（脚韻）を利用した表音性の整理の仕方を提案する。

【キーワード】 漢字音 音符 表音度 双声 疊韻 押韻

Approaches to Kanji Learning (1) : on the use of phonetic elements

Kaiser, Stefan

The study and teaching of kanji in Japan and abroad has traditionally relied on rote learning and repeated copying of kanji. However, to facilitate the learning of the so-called shape, sound and meaning of kanji, a variety of approaches have been proposed. This paper first divides the major approaches into 7 types on the basis of their characteristics, and proceeds to examine in detail the sound-based method, as exemplified in what may be termed the bottom-up and the top-down phonetic approach. Furthermore, the concept of phoneticity of kanji is explored by examining the pros and cons of past research, including attempts at quantifying phoneticity. In conclusion it is proposed that the preponderance of focussing on the relation between phonetic indicators and their relation to kanji that contain them may for better results be modified to an arrangement where kanji sharing a phonetic indicator are ordered by alliteration and rhyme, both familiar concepts in classical Chinese and its Japanese descendant, *kanbun*.

1. 漢字学習・指導の各種アプローチの概観

漢字の学習・指導は日本・海外ともに伝統的にはただただ繰り返し書く作業を中心に行われてきた。しかし、漢字のいわゆる形・音・義を記憶しやすくするために、いろいろな方法が考案されてきた。そういった方法を大きく分けると、七つほどに分類できる。すなわち1. 漢字の形だけ記憶させる方法、2. 漢字の形・義を甲骨文字、あるいはそれに似せたような原始的絵画要素による形と意味の関連づけによって記憶する方法、3. 漢字の形・義を漢字の構成要素の分析・再構築によって記憶する方法、4. 漢字の形・音・義を音符と意符の組み合わせによって記憶する方法、5. 漢字の形・音を唱え言葉によって記憶させる方法、6. 漢字の義を語彙として関連づけて、意味の野・場面の中で記憶させる方法、7. 以上1～6の部分・全体を二つ以上を組み合わせた方法である。

以上のような各種方法の大別は表面的な特色によるものではない。たとえば、「唱え言葉」による覚え方は日本語・英語などの学習書に見られるが、音（読み）が入ってくるのは日本語のばあいだけであるから、それぞれ4と2に分けた。

1.から7.までそれぞれ例を簡単にあげる。

1. Foerster/Tamura (1994) は常用漢字を488の書記素の組み合わせとして捕え、類似書記素にグループ分けする。各漢字は書記素グループに従って提出する。提出順の例が以下のような具合である。

(1) 楽・葉・綿・原・源・願・百・宿・縮、・・・

2. Vaccari and Vaccari (1950) ではたとえば「妻」の形を女・物を持つ形の手・ほうきという象形の組み合わせで提示し、四つの段階で現在の形に至っている変化を示す。

3. Heisig (1977) は「舌」を口と千の組み合わせとして説明し、英語の「共通の言語」というイメージを利用して、「舌は口から口へと伝えられる」⁽¹⁾という唱えことば（覚え話し）を提出している。

4. Habein and Mathias (1991) は「古」を音符として持つ字を集め、「居」に対して次のように説明する。「居」は「尸」（おしり）と音符「古」（とどまる）を組み合わせたもの。意味は「とどまる;すむ」。

5. 浜西正人 (1983) は「然」に対して、次のような唱えことばを作っている（ふりがなは省略）。

(2) 「然の字は天然自然と読み分ける」

「犬の肉火で燃えあぶら自然に出」

6. Kanji Text Research Group, University of Tokyo (1993) の例をあげると、十二課が「郵便局」と題する課で、新出漢字は郵・局・切・外・国・際・航・空・常・料・他・様。ちなみに、「常」

は「通常」、「他」は「その他の地域」という語彙として現われる。

7. 何らかの形で組み合わせを利用するものが多いが、一例をあげると、Rowley (1992)は「始」を女に「台」(=鼻と空いた口)の図形として捕え、次のような唱え言葉を沿える。・・・でも、誰よりも先に口をあける・・・⁽²⁾。つまり、これは1と3を組み合わせた方法になる。

2. 漢字指導・学習における「読み」習得の問題

外国人学習者が上記の3. や7. のような方法で学習するばあい、英語(または学習者の母語)による唱えことばや覚え話によれば、意味は読み込んであっても日本語の語彙までは無理であることが大きな欠点というべきである。このような学習方法のせいか、非漢字圏の留学生によく見られることは、ある漢字の意味は思い出せても、日本語の語彙としての音声思い出せないという現象がある。

日本人、つまり母語話者による学習のばあい、新出漢字は通常語彙としてすでに知っているのに対し、非漢字圏外国人学習者のばあいは普通、新しい漢字が表記する語彙も多くのはあい未習であるという大きな状況の違いが存在する。上記6. のような、新漢字の読みを含む唱え言葉(「然の字は天然自然と読み分ける」)を可能にするのは、やはり既習語彙の存在である。そのことは酒井(1993)が外国人学習者用に提唱する「唱えことば」を上記浜西のものと比較すると、一目瞭然である。

(3)「美」：大きい羊は美しいです。

「始」：女の人が台所でしごとを始めます。

これは音読みなどは出て来ない点ではむしろ上記3. の方法に近いが、日本語によるものなので、せめて訓はある程度読み込めるという利点があるのみならず、やさしい語彙が使われているので非母語話者にも使えるメリットがある。

3. 表音的アプローチ2つ

3.1 ボトムアップのアプローチ

上記Habein/Mathias (1991)は常用漢字全体を扱っており、もちろん象形文字だけの学習書ではない。主なセクションとして次のa~cがある。

(4)a. 基本形漢字 (Basic-Form Kanji)

b. 会意漢字 (Semantic Compound Kanji)

c. 形声漢字 (Phonetic Compound Kanji)

a. は意味分野によっていくつかのグループにわけてあり、指示文字も含まれている。構成要素

に分解できないもので、多くは部首である。

b. には、a. に「画を加えた」もの（久・本などの、いわゆる象形指示文字）、狭義の会意文字とその部首を集めている。

c. が本書の最大の部分であり、本稿で形声文字中心のアプローチとして扱っているゆえんである。音符として使用される基本形漢字、音符として使用される会意漢字、その他の音符に分かれているが、すべて形声文字である。c. から例をあげる（説明は省略）。

(5)辟（ヒャク／ヘキ or ヒ／ビ）・・・

避（ヘキ／さ・ける）・・・

壁（ヘキ／かべ）・・・

癖（ヘキ／くせ）・・・

(Habein/Mathias 1991 : 257)

避に対して音「ヘキ」となっているのは単なる誤植かもしれない（語彙例として「避暑ヒシヨ」があがっている）が、音符「辟」についてヘキとともにヒという音が出してあるのは、理解しがたい。典拠は示されていないが、たとえば参考文献としてあげられている藤堂（1980）では、2つ意味があるとし、「きみ」の意味では呉・漢音をヒャク・ヘキとし、「つみ」の意味では同じくビャク・ヘキとする。いずれにせよ、なぜ呉音のヒャク・ビまで付けてあるか不明であり、その教育的狙いも理解できない。下記の伊藤（1979）の音符準拠の考え方に通じる点が認められる。

この音符中心アプローチのもう一つの特徴としてあげられるのは、部首や旁などと、漢字の部分（書記素）から入り、その部分をだんだんより大きい複合体にくみあわせていくやり方である。いわば、ボトムアップ的音符中心アプローチである。

3.2 トップダウンのアプローチ

漢字の表音性を利用したもう一つのアプローチはPye（1971/84）でとられている。

Pye（1971/84）は主にセクションAとBからなっているが、Aでは常用漢字その他をまず音読み別に分ける（カン・コウ・センなど）。さらに、それぞれの音読グループで共通音符をもつ漢字を集め、最初の漢字の音と同じである（つまり、予測可能）かどうか記述する。

ただ、Pye（1971/84 : 67/63）のように、「厚」を筆頭に「孝・好」などの会意文字がいっしょに入り込んでいたり、形声字でも「考・拷」で一つのグループを作りながら、同音符の「号」が入っていないかったり、また「巧」のように別のグループ（「工」）に入れられたりしており、整理の仕方がいま一つであるのが残念である。

では、基本的な表音性の捕え方はどうであろう。「カン」の中のグループから少し例をあげよう。

(6)カン 敢 . . .
 ガン 巖 . . .
 NOT 巖 . . .

カン 監 . . .
 カン 鑑 . . .
 カン 艦 . . .
 NOT 覧濫藍ラン p. 167.

カン 甘 . . .
 カン 酣 . . .
 カン 柑 . . .
 NOT 紺 コン . . .
 NOT 媒煤パイ p. 136. 某謀ボウ p. 155.

カン 官 . . .
 カン 館 . . .
 カン 管 . . .
 カン 棺 . . .

(Pye (1971/84 : 36より))

(上記の抜粋で . . . としてあるのは、該当漢字の読み・意味・語彙例などの説明の部分の省略を示している。小字は常用漢字表外字を差す。)

上記から分かるように、清濁の違いは無視しており、同音と扱っているが、NOTの基準は何であろうか。次の例を見よう。

(7)コウ 工
 . . .
 NOT 空 クウ . . .
 . . .
 . . . NOT 恐 . . . キョウ . . .

(Pye 1971/84 : 68-69より)

つまり、同じカ行音（コ・ク）の違いや拗音（コ・キョ）の違いは不同と判断されている。

4. 漢字の表音度という問題

他の研究では音符の表音度がどう扱われているのだろうか。伊藤（1979）は、当用漢字1850字と、「新漢字表試案にあって当用漢字表にない字」83字の計1933字についてその表音度を調査したものである。

方法として用いているのは次のような手法である。まずは、全1933字について複数の字源辞書も参照して、1278字（66.1%）が形声文字であるとした。それから、訓読専門の字を取り除いた残りの1248字についてその音符をとりだした上、同じ音符をもつ漢字のグループを集め、音符と形声字群が一致するかしらないかを調べた。つまり、比較の基準としたのは伝統的にある音符がもつ音で、それを各グループ内の漢字と照合するわけである。一、二例をあげる。

(8)ハク	白	伯拍泊迫舶／百
シュ	主	／住注柱駐

著者のいう「造字度」は、白のばあいでは一致5／不一致1で、主のばあいでは一致0／不一致4となる。

何が形声文字で、何がそうでないのかの判断の基準には絶対的なものがなく、辞書などによって違うという問題がある。しかし、それは現在のところいかんともしがたい問題であるから、追及しない。

それから、漢字表では2種類の音が認められているばあいに両漢字群に当てはめていることも問題であろう（どのばあいどう読むか、規則がないわけである）。

(9)セイ・ショウ	正	整政征証症／定
テイ・チョウ	丁	訂亭町疔頂／超

なお、Pye（1971/84）ではセイ・ショウなどが別のグループとなっているため、この問題は避けられている。そもそも辞書などで割り出している音符の「読み」は独立して使われるばあいももちろん参考にされているが、それが音符としてついている形声文字の読みも参照される。しかし、表外漢字の次のような出し方はどうであろう。

(10)ヤ	也	／池地他施
タイ	台	怠胎／始治

2年生が「台」を習得するときには、タイではなく、助数詞の「ダイ」として覚えることから

問題になるが、そもそも漢字の音符になるばあいには「也」にはもともとヤ・チの2音があり、台にはタイ・シの2音がある（たとえば、小川他1968）からこそ、前者を音符にもつ字には他・地、後者に胎・始という幅が出てくるわけである。

しかし、最大の問題は単独音符の読みを基準にしていることであろう。だから、シュ 主／住注柱駐という不一致が出てきたりするわけである。単独音符と同じく3年生学習漢字の住注柱を考慮すれば、シュがむしろ例外的な読みとなるからである。「部倍培陪賠剖」がすべて不一致となっている際の音符は独立して使われないのに、「ハイ」として提出してあるが、6字中4字が「バイ」であり、このばあいでも音符を基準にすることの無意味さが目立つ。小学校などにおける漢字学習のあるべき姿を問題にするのであるならば、現行の学習順を基準にすることはそもそも無意味であろう。

いずれにしても、ここでの一致／不一致の捕え方は程度問題を考慮せず、清濁の違いでも不一致となる点が上記（Pye 1971/84）の場合と違う。

野村・伊藤（1978）（この論文は当時未発表だった伊藤（1979）の成果を利用している）では不一致の程度を問題にしている。

方法としては、伊藤（1979）が使ったのと同じコーパスの形声字1137字について、その総音数である1240音にCVCVの構造を想定し（モーラ音素はCに含まれる）、音符の音とその音符を含む漢字を比較したもの。二例あげる。

(11)(滑=0.75)	CVCV	(佳=0.50)	CVCV
全体の音	KATU	全体の音	KA__
音符の音	KOTU	音符の音	KE_I
	OXOO		OXOX

以上の結果、以下の5段階の一致度が得られた。

表1 当用漢字等音符の一致度

一致度	全形声文字中の割合
1.0	57.6%
0.75	18.3%
0.5	09.4%
0.25	05.0%
0.0	09.7%

一致度0.75のものについて、野村・伊藤（1978）はさらに異同の内容を次のように分類している

(アルファベット小文字は拗音を示す、例えば k=ky)。

表2 異同内容の分類

1	音素数が一致するもの		91%
1-1	母音の不一致	例：返 (A/E)、握 (O/A)	23%
1-2	子音の不一致		68%
1-2-1	清／濁音	例：詩 (Z/S)、紡 (H/B)	23%
1-2-2	直／拗音	例：居 (K/k)、逃 (t/T)	07.5%
1-2-3	その他	例：岐 (S/K)、殖 (t/s)	37.5%
2	音素数が一致しないもの		09.%
2-1	母音の増減	例：衛 (I/EI)、哀 (I/AI)	00.9%
2-2	子音の増減	例：偽 (I/GI)、船 (EN/SEN)	05.%
2-3	モーラ音素の増減	例：厘 (RI/RIN)、愚 (GU/GU)	03.%

(野村・伊藤 (1978) 310に基づく)

野村・伊藤 (1978) は、表2、さらに一致度0.5のばあいについて次のようにコメントしている。

(2)・・・母音の不一致、清音と濁音の対立、直音と拗音の対立などについては、音符から全体の音への類推が付きやすそうに見える。しかし、その他のばあいは、音素1個の相違といっても、かなり、くいちがっているという印象をうける。・・・0.5以下のばあいには、音符の効果は、ほとんどないといっても、よいだろう。(3)

(野村・伊藤 (1978) 310～311)

つまり、1-1から1-2-2までは類推がきくが、それ以外ではためて、0.5以下ではなおさらそうだという。しかし、なぜ母音の不一致(1-1)がよく、1-2-3の子音の不一致がいけないのか、説明がない。

そもそも、「音符の効率」ということは、どのように考えたらよいか。「音符から全体の音への類推が付きやすい」ことだけでは学習・指導の立場からいうと、不十分である。音符だけを基準にす

るのは、同じ音符を共通にもつ漢字のグループの適切な結び付けになるとは限らない（下記（15）参照）し、学習する上では「予測」というよりも「関連付け」が有効であることはいうまでもない。

関連付けの仕方にはPye (1971/84) のとらえ方も参考になるが、野村・伊藤 (1978) のような音素ベースの考えを発展させた形に「韻」を加味した方法も考えられる。

カイザー (1995) では、漢字学習と押韻の関係をとりあげた。野村・伊藤 (1978) の上記の議論をその観点から見直すと、1-1と1-2-3の違いが母音・子音の問題としてではなく、別の境界線で整理したほうが適切であることが判明する（下線＝韻を踏んでいる部分；小文字＝拗音素）。

(13反返	HAN	HEN	頭韻（双声）
屋握	OKU	AKU	} 脚韻（疊韻）
岐支	KI	sI	
直殖	tOKU	sOKU	

つまり、頭韻（双声）と脚韻（疊韻）の違いとして整理しなおすことができる。2-1と2-2も、同様な処理が可能である（´＝声門破裂音）。

(14韋	衛	ˊI	EI
衣	哀	ˊI	AI
為	偽	ˊI	GI
台	船	ˊEN	SEN

残るは、2-3である。RI/RIN、GU/GUUとして頭韻として片付けることが可能であろう（双声の「参差 sINsI」など参照）が、いずれにしるこのタイプはたいへん少ないから、それほど問題にならない⁽⁴⁾。しかし、問題はやはり音符を基準にすることで、本来教育上十分活用できるはずの規則性まで失われてしまうことである。

Stalph (1989:150) がいうように、傷⁽⁵⁾場揚湯腸陽の規則性を音符ヨウのみでとらえると、場湯腸は不規則になるから、全体の共通要素という観点が必要になる。Stalph (1989:150) によると、規則的な韻尾 -ò（長音）が共通している。（野村・伊藤 (1978) の表記を少々修正したローマ字表記⁽⁶⁾で示すと、その規則性がさらによく分かるのである。

(15漢字	野村らの表記	一般的表記
傷	sOU	shò
場	dOU	jò

揚	YOU	yô
湯	TOU	tô
腸	tOU	chô
陽	YOU	yô

これからの表音性を考慮した漢字教育では以上のような観点が必要になり、特に押韻が一般的に使われている多くの文化圏出身者に対し有効であると思われる。

本研究は平成7年度文部省科学研究費基盤研究(A)(課題番号07558148)、代表カイザー、シュテファン)・基盤研究(B)(2)(課題番号08458054、代表カイザー、シュテファン)の助成を得た。

注

- (1) a single **tongue** being passed being passed around from *mouth* to *mouth*. (Heisig 1977 : 28)
- (2) ...but is the **first** to open her mouth... (Rowley 1992 : 80)
- (3) 同じ統計をもとに、林大監修(1982:218)では、次のようなまとめ方をしているが、野村・伊藤(1978)のこのコメントの趣旨とはずいぶん違った理解の仕方になる。

完全に一致	57.6%
ある程度一致	32.7%
全く不一致	09.7%

- (4) 愚の音符はグウではなく、グともいわれるから、そうすれば音符を基準にしたばあい同音になる。
- (5) 傷は(伊藤1979)にはとりあげられていない。しかし、歴史的には音符が場などと関係がある。
- (6) 長音は棒引きではなく、Uで示してある。

参考文献

1. 伊藤菊子(1979)「形声文字と漢字指導」『言語生活』326:68-81
2. 小川環樹他編(1968)『新字源』角川書店
3. カイザー シュテファン(1995)「漢字学習と押韻—非漢字圏学習者に対する漢字教育を考える—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11:99-112
4. 酒井順子(1993)「初級漢字600字における効果的な漢字導入の試み—CAI化に先駆けた紙メディアおよびOHPによる指導法—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』87-90
5. 藤堂明保(1980)『学研漢和大字典』学習研究社

6. 浜西正人 (1983) 『浜西式角川漢字学習字典』 角川書店
7. 野村雅昭・伊藤菊子 (1978) 「漢字の表音度」 『計量国語学』 11-7 : 306-311
8. 林大監修 (1982) 『図説日本語 — グラフで見ることばの姿 —』 角川書店
9. Habein, Yaeko S. and Mathias, Gerald B. (1991) *The complete guide to everyday kanji*,
Kodansha International
10. Heisig J. W. (1977/85/94) *Remembering the kanji: a complete course on how not to forget the
meaning and writing of Japanese characters, Vols 1 - 3*. Japan Publications Trading Co.
11. Kanji Text Research Group, University of Tokyo (1993) *250 Essential kanji*. Tuttle.
12. Pye M. (1971/84) *The study of kanji: a handbook of Japanese characters*. Hokuseido Press.
13. Rowley, Michael (1992) *Kanji Pict · o · graphix: over 1,000 Japanese kanji and kana
mnemonics*. Berkeley, Ca.: Stone Bridge Press.
14. Stalph J. (1989) *Grundlagen einer Grammatik der sinojapanischen Schrift*. Wiesbaden:
Harrasowitz.
15. Vaccari, O and Vaccari, E. E. I. (1950) *Pictorial Chinese-Japanese Characters: a new and
fascinating way to learn ideographs*. London: Kegan Paul.